



# らふいのおばあちゃん

外国人おばあちゃんは  
自分をグランマと  
呼んでいた

らふい

らふいのおばあちゃんは外国人

---

らふいのおばあちゃんは外国人。

白髪になる前、金色だったの。

らふいのおばあちゃんはおじいちゃんと一緒に日本に来たんだ。

らふいが小さい頃、おばあちゃんは日本語があまり出来なかったの。

それでも、小さい頃のらふいも簡単な言葉しか知らなかったから、なんとか会話出来てた。

らふいはそんなおばあちゃんが大好きだった。

## 丁寧語おばあちゃん

---

らふいが小さい頃 気付かなかったんだけど

おばあちゃんはいつも丁寧語だった。

おばあちゃんが喋ると、こんな口調だった。

「グランマは元気ですね。洗濯もしましたね。」

どんな年齢層に対しても丁寧語。

グランマとは、英語の*Grandmother*を略して*Grandma*と現したもの。

日本語で言ったら、おばあちゃん をばあちゃん って言ってる感じ。

らふいはそんなおばあちゃんをグランマと呼んでいた。

## グランマの日本語

---

らふいのグランマは、一生懸命らふいと日本語で会話してくれた。

それは、らふいのおかあさんが日本人でらふいは英語が出来なかったから。

そんなグランマの日本語は時々おかしかった。

「グランマはですね、ハジメテ 粉を入れましたね。それからですね、お砂糖を入れましたんですよ」

ニコニコとしながらグランマは言った。

らふいがクッキーの作り方を教えてもらった時だった。

「ハジメテ は初めに だよ」

らふいのおとうさんが優しく言った。

グランマのニコニコ顔は、一瞬で大笑いの顔に。

らふいは自分の失敗を笑い飛ばすグランマが好きだった。

## グランマのハグ

---

らふいのグランマはらふいをすごく大切にしてくれた。

らふいが幼稚園で劇をやって頑張った時、終わった後いつもグランマが迎えて

「らふい、グランマ感動しましたよ！頑張りましたね」

そう言って、いつもハグをくれてた。

らふいが泣いた時もグランマは心配そうな顔をしながら

「らふい、大丈夫ですよ。グランマがいますからね。あめ玉、あげましょうか」

優しくらふいをハグしながらなだめてくれた。

らふいはそんなグランマのハグが大好きでいつもハグしてた。

## グランマの不思議なおやつ

---

「らふい、おやつはいりますか？」

らふいがグランマの家に行くと、必ずグランマは聞いてきた。

らふいは満面の笑みで頷くと、台所へ向かった。

「はい、どうぞ」

可愛らしい包装紙に包まれたあめ玉やチョコ、色んなお菓子をグランマはくれた。

ある時、らふいはおやつのある場所が気になった。

グランマが台所からいなくなった時、らふいはこっそりと探しまわった。

シンクの下、シンクの上

冷蔵庫の中、冷凍庫の中

テーブルの下、テーブルの上

食器棚に、植木鉢の中まで

でも、どこを探してもなかった。

「どうしました、らふいちゃん？」

戻って来たグランマにビックリしながら、らふいは聞いてみた。

「おやつ・・・どこにあるか知りたくって」

グランマはにっこり笑って、唇に人差し指を当てた。

「内緒ですよ」

そう言って唇に当てた人差し指を空に指して

「あの上にある、クマの入れ物にありますよ」

してみると、食器棚の上に置いてあったクマの形をした透明の容器にお菓子が沢山入ってるのが見えた。

らふいだけに教えてくれた内緒。

らふいは初めてグランマと内緒話しが出来て嬉しかった。

## グランマとクリスマス

---

らふいはお正月を日本人おばあちゃんと、クリスマスはグランマと過ごしていた。

グランマと過ごすクリスマスはいつも沢山の親戚が集まって、グランマの家で祝った。

「Merry Christmas! イエス様の誕生日ですね。はい、プレゼント」

グランマは外国人だから、お年玉の風習がなかった。

それでも、らふいに沢山のおもちゃや服をくれた。

らふいはそれがすごく嬉しかったんだ。

「ありがとう、グランマ！メリー・クリスマス！」

らふいはプレゼントを受け取って、ラッピングをはがした。

「うわー！これ、ずっと欲しかったの！！！」

開けると、お化粧道具が入ってた。

「らふいが喜んでくれて、グランマ嬉しいですよ。まだ沢山ありますからね」

グランマは一つのプレゼントだけじゃなくて、いつも沢山のプレゼントを用意してくれてた。

らふいはそんなグランマが大好きだった。

## グランマとクリスマス2

---

らふいのグランマとのクリスマスと言えば、プレゼントの他にもう一つ。

食事がある。

イエス様の誕生を祝う日としてクリスマスを祝っているだけあって、食事が盛りだくさん！

グランマは腕を振るって、洋食を作ってくれてた。

その中でも一番目玉なのは、パブロバっていうデザート。

卵白と砂糖だけで作るから、ふわっふわで甘い。

らふいはメインに出て来る料理よりも、デザートのパブロバをお腹いっぱい食べていた。

らふいはグランマのパブロバが大好きだった。

## グランマと英会話

---

グランマと英会話ができるようになったのは、らふいが海外に行ってから。

知ってる単語は、Good night と Happy birthday だった。

そんならふいだったけど、海外で泣きながら英語を勉強した。

そんなある日、日本からグランマが来てくれたの。

英語を勉強してらふいがグランマに初めて言った英単語は

"How are you? (ハウ・アー・ユー) "

元気だった? って意味の英語。

グランマはらふいの英語に驚きながらも笑顔で言ってくれた。

"I'm fine! Give me a hug, Lafie"

らふいはその日からグランマと英会話をするのが好きになった。

## グランマと将来の話

---

すっかり英語が話せるようになって、らふいは帰国した。

グランマとの英会話も沢山出来るようになって、今まで話せなかった沢山のことを話せるようにもなった。

らふいが思春期を迎えると、グランマとの話題は恋バナや結婚の話で盛り上がった。

「グランマ。この間ね、夢にグランマが出て来たんだよ」

らふいはこうやっていつも夢の話や日々の出来事をグランマに話してた。

「あのね、それも結婚式でね。グランマも皆もいてね、すごく良かったの！」

ソファーに座りながら編み物をしていたグランマは手を止めて、私の目を見つめて言ったの。

「グランマもらふいの結婚する夢を見ましたよ」

らふいは驚いちゃって、

「え？いつ見たの？？どうだった？素敵だった??」

次から次へと質問してしまったの。

でも、グランマは落ち着いて一つ一つ答えてくれた。

「とても素敵でしたよ、らふい。とても良かったですよ」

良かった、とらふいは安心した。

でも、一つ気になってらふいとおばあちゃんが、

「でも、旦那さんは・・・？」

らふいもグランマも旦那さんの顔を覚えていなかった。

らふいは何でも話せるグランマが大好きだった。

## グランマと病気

---

らふいはいつまでも元気で明るいグランマといれると思っていた。

でも、らふいが小さい頃からグランマは病気と闘っていた。

らふいが大学生くらいの時だった。

大学で夕飯を食べようとしていた頃、おとうさんから電話がかかってきた。

「らふい・・・グランマが」

この時の電話の内容を今でもらふいは忘れることが出来ないくらい辛いものだった。

らふいは知らなかった。グランマが病気だなんて。

らふいは大好きなグランマを苦しめる病気が嫌いになった。

この時、らふいのグランマは余命1年と言われた。

## グランマの奇跡

---

らふいのグランマが余命1年と言われてから、全て取り上げられた気がしてならなかった。

まだ生きているのに、失った様な錯覚に陥った感じがして。

そんならふいに希望を与えてくれたのは、病を患いつつ微笑んでいたグランマだった。

「らふい、グランマは大丈夫ですよ！必ず元気になりますからね」

一番苦しんでるグランマに励まされてるらふいはもう泣かないことを決めた。

刻一刻と時を刻みながら、余命1年の日まで近付いていた。

余命宣告された日が来て、グランマは家で休養していた。

らふいは恐る恐るグランマに聞いてみた。

「具合、どう？」

リクライニング・チェアに足を伸ばして、窓の外を眺めてたグランマがらふいの方を振り向いて、

「グランマは大丈夫ですよ。前よりも元気ですね」

そう言って、今までにもない笑顔を見せた。

グランマはそうやって余命宣告を乗り切った。

らふいは病を患いながらも決して面に出さないグランマを尊敬した。

## グランマと涙

---

余命宣告を乗り越って、益々元気になったグランマ。

そんな姿が嬉しくもありつつ、不思議だった。

らふいはそんなグランマを見て、安心した。

安心したこともあって、再びらふいは海外に行くことになった。

そのことを知ったグランマは、泣きながららふいに言ったの。

「グランマはですね、いつもらふいを愛してますからね」

らふいは分かってるよ、らふいも愛してるよと伝えて海外に飛び立った。

らふいが海外で過ごしていたある日、おとうさんから電話がかかってきた。

「らふい。グランマが危篤状態だよ」

らふいは混乱して、おとうさんに言った。

「どういうこと？」

「グランマは危篤状態で、病院にいるんだ。今、話しかけても返事がない状態なんだ」

らふいのおとうさんの声が少し震えてる様にも聞こえた。

ようやく状況が飲み込めたらふいは、こう言った。

「・・・そう、なんだ」

「おとうさんからグランマにらふいが愛してるよって言ったことを伝えるよ」

らふいのおとうさんは気を利かせて、そう言ってくれた。

「うん・・・ありがとう」

色々話した後、電話を切った。

切った瞬間、涙がポロポロと流れ出た。

## グランマ、今でも愛してるよ

---

らふいのおとうさんから電話がかかってきて、涙が止まらなかった。

でも、不思議と前のような喪失感はなかった。

「グランマ・・・I love you.....ウック、ウック」

らふいは何でこんな言葉を言ったのか分からないけど、夜の深まる海外で泣きながらつぶやいた。

そうして夜が明けて、グランマが天に召されたことを知った。

グランマが活着ている間に二人で語った夢の話や結婚の話はまだ叶えられなかったし、今もまだ。

それでも、空を見上げれば手を広げてらふいを呼んでるグランマの姿が見えるような気がする。

ここからグランマはいなくなってしまったけど、喪失感はない。

今も、これからもずっとグランマと語ったことを胸に現実にしていこうと考えて生きてる。

らふいがグランマのように、白髪 of グランマになってらふいの孫に同じことが出来る様に

らふいのおばあちゃん

<http://p.booklog.jp/book/25320>

著者：らふい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ye4la/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25320>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25320>